The Scenes of Goethe’s “Faust” seen in Paintings on the Emergency notes during the Weimar period : Issue of Paper-money as the Alchemy

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 義信 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6579

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ヴァイマル期緊急紙幣の券面に見るゲーテ『ファウスト』の諸情景

―錬金術としての紙幣発行―

森　義信*

要　　約

ゲーテ『ファウスト』の第一部「悲劇」において、主人公グレートヘンはファウストが差し出した宝飾品に目が眩み、これを我物としてファウストの愛を受け入れた。このことによって彼女は、破滅への道を歩んだ。

第二部では、財政難にあえぐ皇帝がメフィストフェレスとファウストの進言を受け入れ、帝国の地中深くにある金鉱脈や埋蔵金を担保として、紙幣を発行する。券面には、皇帝の親署と金への兌換保証が明記されていた。この紙幣によって、帝国の経済は一時的に大いに繁栄するが、やがて国内秩序は乱れ、内戦に至る。

第一次世界大戦中からドイツ国内で進行したインフレーションは、ヴァイマル期に一層その上げ足を速めた。物価は高騰し、貨幣価値が日々下落するなか、ライヒスバンク（国立銀行）の高額紙幣や地方自治体の緊急紙幣（ノートゲルト）が大増刷された。緊急紙幣の中には、『ファウスト』における金銭にまつわる劇中シーンに題材をとった絵画を、券面に描いたものがある。

本稿では、こうした紙幣の券面に描かれた図版や引用句、台詞を紹介しつつ考察を加え、さらにゲーテ『ファウスト』の該当する箇所を仔細に点検した。これらの考察をまとめる形で、金兌換紙幣及び無制約となった不換紙幣の発行について論じた。

はじめに

ゲーテ『ファウスト』第一部「グレートヘンの悲劇」は、老いた学究の徒ファウストが魔法遣いメフィストフェレス（以下メフィスト）に誘惑されて、死後に魂を差し出す代わりに、今生の最高の喜びを享受する契約を結ぶところから始まる。純真で穢れを知らないグレートヘンに一目惚れしたファウストは、グレートヘンの心を掴み取るため、メフィストに宝飾品を用意させる。これが見事に功を奏し、彼女の身も心もファウストのものになる。己の欲望を果たしたファウストではあったが、やがて彼女を不幸のどん底に陥れ、無残な死に追いやる展開となる。グレートヘンは、妊娠して未婚の母となったが、嬰児を殺して獄に繋がれる。ファウストは、事情を知らぬまま幾ばくかの後ろめたさを背負って、ワルプルギスの夜、魔女たちの集会に合流して乱痴気騒ぎをする。悪魔に魂を売り渡すことの顛末が、第一部のエンディングを構成する。

*大妻女子大学名誉教授

第二部において、メフィストとファウストは、財政的苦境にある皇帝に対して、支配下にある領国の地下に眠る金銀財宝を担保に、紙幣を発行するよう勧める。新発の紙幣は電光石火のごとく、全国各地に撒き散らされる。この紙幣を持った者たちは、両替屋に急ぐ。この紙幣を既発の貨幣、コインに両替するためである。このとき、相応の手数料という名の割引がなされる。つまり、発行された紙幣は、両替の過程で額面通りではなく、減価されるのである。

『ファウスト』のこの部分の叙述は、G.A. クレイグによれば、20 世紀初頭のドイツの経済・社会状況にぴたり一致するという。すなわち、第一次世界大戦に突入した 1914 年、ドイツ帝国議会は戦費調達に苦しむ政府に対して、50 億ライヒスマルクの借入と、金準備で保証されない不換紙幣の発行を認めた。戦争継続のための種々の需要に対処するものではあったが、これによって、流通する貨幣の量は膨大となり、ライヒスマルクの価値は下落したとされる[1]。

クレイグは続ける。ゲーテが描き出したメフィストとファウストによる劇中の「実験」が、ドイツの歴史の中で一度ならず壮大な規模で現実のものとなっている。その結果、通貨の変動というメフィストによる暗示が、ドイツ人の心理に致命的な痕を残すことになった。ゲーテという文豪の評価は種々あろうが、クレイグは以上の所見から、「予見力をもったこの詩人（ゲーテ）を信ずる気になる」とまでいう[2]。

致命的な傷痕を残したのは、いうまでもなく第一次世界大戦後に起こったドイツのハイパーインフレーションである。この時期には、高額のライヒスマルク紙幣が大増発されたが、急激なインフレの昂進には追い付かず、地方自治体や企業までもが緊急紙幣を大増発した。この緊急紙幣の中に、上記『ファウスト』の情景描画を券面に印刷したものがある。

本稿では、『ファウスト』劇中の紙幣の発行と、ハイパーインフレーション期の緊急紙幣の発行、これを繋ぐ緊急紙幣の券面に描かれた『ファウスト』の情景描画を手掛かりとしつつ、紙幣＝お札についての小論を展開してみた。

1　ヴァイマル期のノートゲルト券面にみられる『ファウスト』の情景描写

1-1　ヴァイマル市におけるゲーテ関連の緊急紙幣（1921）

フランクフルト生まれのゲーテ（1749~1832）は 26 歳の時、ザクセン・ヴァイマル・アイゼナッハ公国のカール・アウグスト公の招きによって、当地に足を踏み入れ、その後、公の厚い信認を得て枢密顧問官、内閣首班、財務長官などを歴任した。アウグスト公は文人を厚遇し、ゲーテのほかシラー、ヘルダー、ウィーラントらを招き入れ、ヴァイマルはさながらドイツ文学の聖地の観を呈した。

ゲーテは、公に休暇を申し出てイタリアに旅立つ（1786 年 9 月）までの十年余りを、公国行政上の枢要な職務に就いていた[3]。

ゲーテ所縁の地ヴァイマル市では、第一次世界大戦後の 1918 年にドイツ共和国（ヴァイマル共和国）の成立が宣言され、翌年には国民議会が置かれ、ここでヴェルサイユ条約の受諾と、ヴァイマル憲法の発布がなされた。共和国の首都機能はその後、ベルリンに移り、ヴァイマルはチューリンゲン州の州都として栄えた（1920 ～ 1948）。

ヴァイマル市当局は、1920 年代初頭の時期、緊急紙幣を多数発行し、ゲーテの肖像やゲーテハウス、『ファウスト』から題材をとった絵と引用句を付すなどして、券面を飾った。そのいくつかを例示しつつ、券面から読み取れる市当局の思惑などについて、先ずは考察してみたい。

図版①　25 プフェニヒの券面中央にはゲーテの東屋の絵が配され、左右に短いコメント「驕り高ぶったところが見えない、この静謐なゲーテハウス」、「中に入ると誰でもが良き雰囲気に包まれる。ゲーテ、1828 年」と記されている。

図版②　裏面にはヴァイマル市のノートゲルトの文字、中央に市の紋章があり、左右に短いコメント「ヴァイマルよ、汝は格別の運命を背負うことになった」「ユダヤの地のベツレヘムのように

図版①　Weimar 市の 25 プフェニヒ緊急紙幣表

図版③　Weimar 市の 50 プフェニヒ緊急紙幣

図版②　Weimar 市の 25 プフェニヒ緊急紙幣裏

図版④　Weimar 市の 50 プフェニヒ緊急紙幣裏

小都市だが偉大な都市である」が付されている。四囲にゲーテ、シラー、ヘルダー、ヴィーラントの影絵の肖像画が配されている。下部に「1921 年 5 月 1 日、ヴァイマル市庁の市長／市議会の議長それぞれの署名、このグートシャインは市のすべてのレジで支払い手段として受領される。本券は公告後一か月で有効性を失う」とある。

図版③　ゲーテの肖像を中央に配置し、下部に②と同一の文面があり、市長と議長の署名も同じである。

図版④　50 プフェニヒ緊急紙幣の裏面には次のような文言が綴られている。「我が戦時賠償は破棄されるべし。全世界は和解すべし！我々〔ドイツ民族〕が裁かれたように、〔隣国の〕兄弟たちよ、星雲のかなたの神が、〔汝らを〕お裁きになる」

1-2　第一部「グレートヘンの悲劇」

『ファウスト』第一部の冒頭は、老学者ファウストと悪魔メフィストとの契約の場面である。ファウストは悪魔に魂を差し出す代わりに、今生の最高の喜びを享受するという契約を結ぶところから始まる。学究的生活の対極、対照にある豊かな生への憧憬が、ファウストの胸中に渦巻いていた。

ファウストは、知識欲とは縁を切って、めくるめく思い、死なんばかりの快楽を求めたいと述べる。しかし、長い髯をのばしているうえに、世渡りが下手、世間に調子も合わせられず、人前に出ると委縮してしまう、どこへ行っても格好がつくまいと愚痴るばかり。そんなファウストにむかって、メフィストは自信を持ちさえすれば結構やっ

ていけるものだと、励ます。

契約が成ったところで書斎には、一人の学生がメフィストに教えを乞うべく登場する。

図版⑤　Vohwinkel 5000 億マルク緊急紙幣 1923

図版⑤　券面の文言は、学生がメフィストに向かって質問をし、これに対する答えの一部である—絵の枠に沿って 1923 年 11 月 15 日のフォーヴィンケル市[4]の物価が記載されている—。

学生は学問を究めたい、学者になりたいと述べ、メフィストに助言を乞う。法学を志そうとする学生に向かって「基本的人権などというものが、問題になったためしはない」と述べ、方向転換を促す。学生は、それでは神学はどうかと問いかけ、問答が始まる。

学　生「言葉にはその内容としての概念がありますね」

メフィスト「その通り。だがそれほどびくびくするにも及ばぬのだ。というのも、ちょうどその概念の無いところへ、うまく言葉が出て来てくれるのだからね。論争をやってのけられるのも言葉があればこそ、体系を作り上げられるのも言葉のおかげだ。言葉に縋って信仰の道も歩いて行かれる。」

前半の「概念の無いところへ、うまく言葉が」という部分が、筆者には今一つよくわからない。そこで小西悟の訳[5]を、ここでは借用したい。次のように訳されている。

学　生「しかし、言葉には内容というものがあるはずでしょう」

メフィスト「その通り。だがあまり思い悩まないことだ。なぜって、内容がないときにかぎって、待ってましたとばかり、ことばが現れるものだ。」

これなら、良くわかる。内容のない奴ほどよく喋る、饒舌な奴ほど中身のない話しかしない、ということで、時代風潮への辛辣な嫌味が緊急紙幣発行者の思惑として読み取れる。券面の絵は、問答の後半に係わる。右手の男は、椅子を持って今にも掴みかからん勢い、左手の男は、暴力はいかん、言葉で争っていたはずだと言って制止している。これも社会風刺の思惑がありそうである。

図版⑥　Vohwinkel 5000 万マルク緊急紙幣 1923

図版⑥　場面は『ファウスト』第一部「魔女の廚」であり、メフィストと魔女の間で会話が交わされる。

魔　女「会得すべし
一を十とせよ。
二は去らしむべし。
ただちに三を作れ
しからば汝、富むべし。
四は手放せ、
五と六とより、
七と八とを作れ、
これ魔女の勧めなり。
それにて成就疑いなし。
九は一にして、
十は無。
これぞ悪魔の九九。」

メフィストはこれを揶揄して

「完全な矛盾は、賢者にも愚者にも、等しく神秘的に聞こえますからね。
学術の道は新しいようで古い。
三位一体だの一体にして三位だのと、
真理の代わりに迷妄を流布せしめる、
これは時の古今を問わずして同じこと。」

ゼロが七つも並ぶ緊急紙幣の券面の数字は、いかにも魔女の手品さながらに、九は一となり、一は十となる。二と四は去らせ、十は無となる。これでは元の木阿弥、全部パーになってしまうではないか。いやそもそも、魔女の九九に惑わされるな、迷妄だけが流布しているのだ、という造幣担当者の揶揄か、警句か。現実を見つめる確かな目が、ここにはある[6]。

メフィストは魔女に媚薬を調合するように命じ、ファウストがその炎の立ち上る薬をぐいと飲み干す。彼は途端に、うら若き女性たちに積極果敢な言動をなすようになる。

場面は「街頭」を経て「夜」へと進む。ファウストが街頭でうら若き女性グレートヘン（マルガレーテ）を見染める。彼女は、父親に死別し母親と二人で倹しい生活を送っていた。妹は幼くして死去し、兄は軍隊にいる。グレートヘンは、懺悔室に入っても懺悔するものなど何一つない、敬虔で純真な乙女であった。彼女に一目惚れしたファウストは、グレートヘンの歓心を買おうとして、メフィストが用意した、装飾品の類を贈ることにした。彼らは彼女の部屋に忍び込んで宝飾品を置いてくる。この品々を、母親が営む質屋に持ち込まれた質草と勘違いしたグレートヘンは、手に取って身体につけて見る。

図版⑦　シュレースビヒ・ホルシュタイン州のハスロー市では、1921年に25，50，75プフェニヒ各2種、計6枚の緊急紙幣を発行している。券面にはいずれも『ファウスト』からの情景が描かれ、短い台詞や詩句が付されている。

グレートヘン「若くて器量よしというだけじゃ仕様がないわ。そりゃ結構なことにはちがいないけれど、それだけじゃやっぱりだめだわ。…中略…
人にちやほやしてもらえるのも、
お金があればこそなんだから、
結局なんでもお金次第なのねえ。
私みたいな貧乏人はつまらないわ」

図版⑦　Hasloh 市の 50 プフェニヒ緊急紙幣 1921

券面の女性グレートヘンは、胸元を飾る宝飾品を首に掛けて、端を手に持ちつつ姿見に見入っている。彼女はこれを自分のものにすることによって、奈落の底に落ちていくことを、まだ知らない。

図版⑧　フォーヴィンケル市では12月に入って、とうとう1兆マルク紙幣が登場した。この券面は⑦と同じ情景、台詞も同じである。

違うのは、グレートヘンの視線のさきに、山と積み上がった紙幣があること、グレートヘンの淋し気な姿が描かれている点であろう。

図版⑧　Vohwinkel 1兆マルク紙幣 1923

券面に描かれている山積みされた緊急紙幣の表面には「ノートゲルト」「ミリオーン」「ビリオーン」「50,000,000」「50,000」「500」といった文字が判読できる。

したがって『ファウスト』の台詞は、1923年当時のフォーヴィンケルの人々にとっては、次のように読み替えられていたはずである。

「金（きん）があればこそなのよ、
何と言っても金（きん）次第なんだから、
こんな紙切れが幾らあってもどうにもならないの、私たちドイツ人は貧しいままなのよ。」

併せて絵の枠外には11月23日付けの物価を示す数字が並んでいる[7]。

メフィストが用意した宝飾品は、見事に功を奏し、グレートヘンの身も心もファウストのものになる。未婚の母となったグレートヘンは、嬰児を殺して獄に繋がれた。ファウストは事情を知らぬまま、メフィストに誘われてブロッケン山に向かう。

1-3　ワルプルギスの夜

ハルツブルク・バート Harzburg Bad 市当局は、ブロッケン[8]の首長ルドルフ・シャーデの名で、『ファウスト』第一部「ワルプルギスの夜」から題材をとった絵画と引用句が印刷されている四枚セットの緊急紙幣を1921年に発行した。絵はフランツ・ユットナー　Franz Jüttner が描いている[9]。

図版⑨　Harzburg Bad の緊急紙幣発売広告用のパンフ

図版⑨　発売を前にして広告用の小さなパンフレットが出され、またセットを挟み込む台紙と思しき紙片も残されている。そこにはF. ユットナーの描くファウスト（左）とメフィストの影絵、「Brocken i. Harz 2.5マルク」とある。この金額は四枚セットの売り出し価格と思われる。

図版⑩　Harzburg Bad　10プフェニヒ緊急紙幣 1921

図版⑩　多色刷りの美しい券面である。ファウストは左手に杖を突き、マントも服も真っ赤に彩られたメフィストの右手は、木の枝を掴んでいる。メフィストは魔女の舞踏の場に向かうべく、ファウスト博士を引っ張り上げている。

メフィスト「森中がめりめり音を立てているじゃありませんか。フクロウが驚いて飛び出してくる・・・」

ワルプルギスは疫病と魔術から人間を護る神で、祭礼は5月1日であるが、その前の晩、魔女

図版⑪　Harzburg Bad　10プフェニヒ緊急紙幣表

たちがブロッケン山に集うて、どんちゃん騒ぎをする。

図版⑪　券面上部の枠内には、「1921年7月1日発行のこのグートシャインが、1922年5月15日まで、ブロッケンのあらゆる売買の場で受領されるべきこと、ブロッケンの首長R. Schadeの署名」がある。

『ファウスト』からの引用句は、

「箒が乗せる、杖が乗せる。
熊手が乗せる、牡山羊が乗せる。
今夜登れないものは、
いつまで待っても登れまい。」

老婆や胸を肌けた若い女性が、箒や杖、熊手、牡山羊に跨ってブロッケン山に向かって行く様が描かれている。牡山羊はハーレムを作り多くの牝を従える、精力絶倫で好色のシンボル的存在。なかには「孕み豚に乗ってくる」猥褻な魔女もいる

メフィスト「若い魔女たちは、あんな風に素っ裸だが、婆さんどもは、さすがにからだを包んでますな。」

若い魔女「髪粉をふったり着物を着たりするのは、お婆さんのすることよ。だからあたしは裸で牡山羊に跨って、活きのいいからだを見せるのよ。」

若い魔女たちはどこまでも快活で威勢がよい。1920年代初頭のベルリンの歓楽街に良く見られた光景が、紙幣発行者の脳裏を過ぎったことは間違いない。

図版⑫　Harzburg Bad 25プフェニヒ緊急紙幣

図版⑫　券面には魔女の合唱

「わたしたちは軟膏があれば元気がつく。
ぼろきれがあれば帆布に十分、
樽ならどれでも舟になる。
今夜飛ばないと飛ぶときはない。」

数え切れないほどの魔女たちが、サターンの待つブロッケンの山頂めがけて急ぎ殺到する。この大混乱のなか、ファウストとメフィストも先を急ぐ。途中でファウストは、グレートヘンの幻影を見た気がしたが、そのすべてをかき消すべく、ただがむしゃらに山頂を目指す。

図版⑬　Harzburg Bad 50プフェニヒ緊急紙幣

図版⑬　ここでは、魔女の台詞

「今日は大きな寄合で、ウーリアーン様（魔王サターン）が座長格、」

続けて「魔女は屁をこく、牡山羊は臭い」とある。

ファウストは踊る相手を捜し始め、髪の長い女を指さして、メフィストにあれは誰かと尋ねると、

メフィスト「あれはリーリト、アダムの最初の女房だ、あのきれいな長い髪の毛にものを言

図版⑭　Harzburg Bad 75プフェニヒ緊急紙幣

わせて、若い男をたらし込んで、決して離しはしない」

危ない女だから別なのにしろと忠告する。

図版⑭　ファウストとメフィストが左右に描かれており、中央の画像は魔女たちの踊り狂う場面。⑬の券面に続いて、ファウストが座っている若い女に関心を示し、踊りつかれて休んでいるのだろうかとメフィストに尋ねると、

メフィスト「また踊る気でいるんですよ。

さあ、つかまえて踊りましょう。」

図版⑮　Harzburg Bad 75 プフェニヒ緊急紙幣

図版⑮　ここには、ファウストが若い全裸の魔女をつかまえて踊りながら

「いつか見た夢、たのしい夢。

リンゴの木が一本あって、

きれいなリンゴが二つなり、

図版⑯　Nordhausen 市の 50 プフェニヒ緊急紙幣 1921

それに惹かれて木登りした。」

ファウストが相手をしている美しい魔女は、殿方がリンゴをお好きなこと、自分の庭にもリンゴの木が二つあると謎かけをする。リンゴは言うまでもなく、女性の乳房のことである。この魔女が歌っている口の中から赤い鼠を吐き出したところで、ファウストはほうほうの体で逃げ出してくる。

図版⑯　ザクセン地方ノルトハウゼン市にある Harzquer u. Brockenbahn 鉄道会社発行のグートシャインである[10]。

右欄に「このグートシャインはどこの駅窓口でも現金化される。本券は回収公告後三か月で通用価値を失うものとする」、下欄には「ノルトハウゼン－ヴェルニンガーオーデル鉄道会社　ヴェルニンガーオーデ 1921 年 5 月 1 日発行　管理局長署名」がある。

中央には、ワルプルギスの夜に題材をとった絵、左の欄に『ファウスト』からメフィストの台詞

「みんなわいわいと上へ登って行こうとする。押しているつもりが、押されているんですよ。」

若い全裸の魔女たちが、サバトに参加すべく箒に跨り上へ上へと昇っていく。何もかもが上方へ渦のように巻きあげられていく。そんな世相をこの一枚の絵が見事に映し出しているとさえいえる。

ファウストが、ワルプルギスの夜、魔女たちの集会に合流したとき、彼はグレートヘンの身に起きた事態をまだ知らない。それなのに、ファウストは山中で彼女の幻影を見た。彼女は足枷を引きずるようにゆっくりと歩み、首には一筋の赤い紐が巻かれている。幾ばくかの罪悪感を背負っていたからこそ、ファウストは獄に繋がれたグレートヘンの幻影を見たのであろう。しかし、ファウストはメフィストに促されて己の罪から目を背け、ブロッケン山中で魔女たちと乱痴気騒ぎをした[11]。

ブロッケン山から下山した後、ファウストは事件の顛末を知るに及んで、獄中の彼女に会いに行くかどうか逡巡する。このとき、「あの罪は悪気のない迷いから出たものだった」と述懐している。彼はグレートヘンに脱獄を勧めるが、己の罪の深

さを自覚し、死をもってつぐなう決意をした彼女にとって、それは意味の無い提案でしかなかった。彼女は、妖怪メフィストと手を切れずにいるファウストに絶望し、救われることを拒絶する。ファウストは、「悪気はなかった」し「脱獄の手筈を整え脱獄を勧め」もしたと、己に言い聞かせたことであろう。しかし、悪魔に魂を売る約束をして、己の欲望を果たした結果として、老学者ファウストは敬虔な一人の女性とその家族全員を、無残な死に追いやった。これほどの惨劇はめったにあるものではなく、犯した罪ゆえにファウストは劫罰を受けるべきものであった。

1-4 『ファウスト』第二部　紙幣の濫発

『ファウスト』第二部は五幕構成である。紙幣濫発の一件は、冒頭の第一幕「皇帝の居城」を舞台にしたものである。

図版⑰　Vohwinkel 1 億マルク緊急紙幣裏

図版⑰　券面表には一億の文字が三か所に印字されている。裏面には山上の城館の描画と『ファウスト』第一幕第一場「玉座の広間」の次のような宰相の言がある。

宰　相「しかるに現今の如く国中が埒もなく乱れ、悪事がさらに悪事を生むと申す有様では、精神に分別が、心に善意が、手にまめやかな意思がございましても、どうにもならぬのでございます。この高殿より広い国内を見下ろしますると、化物が化物らしく我物顔に振る舞い、無法が法を抑えつけ、誤りの世界が繰拡げられておりまするその有様は、さながら悪夢を見る想いでございます。」

「こうして世間の万事がばらばらとなり、当然のことが当然でなくなるのでございます。このような有様で、それのみが私どもを正道に導き進めてくれますところの、徳義心が伸び育つものでございましょうか」

フォーヴィンケル市の財政当局者は宰相の言を引用しつつ、1923 年当時のドイツ社会・国家の在り様を、心の問題を中軸に据えつつ痛烈に批判してやまない。当該市のみならず、ドイツの多くの善良な人々の脳裏には、悪夢というよりは深い絶望が過ぎっていたにちがいない。

図版⑱　Vohwinkel 500 億マルク緊急紙幣　1923

図版⑱　財務大臣（大蔵卿）の言と国庫が空であると訴える絵画の付いた高額紙幣が発行された―枠に沿って 10 月 30 日の物価が記載されている―。大蔵卿の指さす先の外枠上辺には「財務局」、扉には「収税庫」の文字が見える。

大蔵卿「放棄せられた権利の数も大変なものでございますから、もう権利らしい権利は何一つわれわれの手許には残っておりませぬ。それから数々の党派も、今では全く頼りになりませぬ。

…当節では隣国に救いの手をのべようなどとは、どの国も致しませぬ。国という国が自分たちの事に追われて手一杯という有様

でございます。金の流入口がふさがれてしまいましたので、銘々で引っ掻いたり、掘ったり寄せ集めたりで、国庫はいつも空なのでございます。」

ゲーテは預言者であったのかと思わせるほどに、1923年当時のドイツの状況にぴたりと一致する台詞ではある。だからこそ、フォーヴィンケル市の財務当局は緊急紙幣の券面に、この台詞を引用し、警句としたかったのであろう。

図版⑲　Hasloh 市の 75 プフェニヒ緊急紙幣

図版⑲　財政難を訴える大蔵卿をはじめとする宮廷官僚とこれにいらだちを示す皇帝に向って、メフィスト「この世の中に、不足のないところはございません。これがない、あれがない。ところで陛下はお手許不如意でいらっしゃる。お金と申すものは床にやたらと落ちていたりするものではございませんが、知恵才覚さえございますれば、ごく深いところから掘り出して参ることも出来ぬ相談ではございません。」

図版⑳　Weimar 市の 75 プフェニヒ緊急紙幣

券面には皇帝の両の足が見えているだけで、主役はメフィストである。ハスロー市当局の造幣担当者は、「知恵才覚があれば」こそ、緊急紙幣を発行したということか。

図版⑳　1921年8月1日付けで額面75プフェニヒのグートシャイン三種が発行されている[12]。中央には、クピドと天駆けるペガサスが次々と生まれ出ずる様が描かれている。

券面の表には「このグートシャインは支払い手段として、市内のあらゆる金融機関で受領される。本券の有効期限は、公示後一か月」、ゲマインデ行政府の上級市長およびゲマインデ議長の署名がある。裏面には、ゲーテ『ファウスト』第二部第一幕を題材にした絵が描かれ、引用句が添えられている—図版21～23[13]。

図版㉑　Weimar 市の 75 プフェニヒ緊急紙幣

図版㉑　空からは紙幣が盛大に降り注いでいる。人々は我先に拾い集め、これを手にして、右端に描かれている両替商のもとに殺到している。宮内卿「飛び散ったものを回収は出来ません。あっという間に散らばってしまったのでございます。両替屋の扉は一杯に開かれっ放しでございますが、と申しますのも、むろん割引のうえで、紙幣を金貨や銀貨に換え

て、払い出しをしておるからでございます。」

皇帝陛下の名のもとに発行された紙幣を入手した市民たちは、先を争うように両替商に殺到し、金貨や銀貨に交換している。紙幣の額面が高額にすぎたからということもあるし、一般の消費生活の中では、紙幣より硬貨が流通していたからという理由もあろう[14]。

ところでこのノートゲルトが発行された1921年当時、人々は紙幣「お札」よりも金･銀･銅･ニッケルなどの硬貨を求め、入手するやこれを退蔵してやまなかった。そういうご時世であったから、両替をしてくれるところがあれば、割引率が少々高くても、自衛手段として、紙幣をコインや外国の通貨に換えておこうとした。券面の絵は、この世相を反映したものであろう。

図版㉒　Weimar 市の 75 プフェニヒ緊急紙幣

図版㉒　中央に着飾った貴婦人が三人、左手の店では布の染色が行われている模様、右手の店内では、生地の裁断や縫製の仕事がなされている。店の外に、力士のようなまわしをつけただけの男性が一人、布地を持って立っている。

宮内卿「服を新調して鼻をぴくつかせようとすると、生地屋は生地を切り売りし、仕立屋が針を選ぶ」

紙幣が出回って人々の手に入ると、途端に消費意欲が増大し、人々はおしゃれに心を配るようになる。

1921年当時、大半の国民が困窮する中で、一部の富裕層には贅沢三昧がみられた。この場面の台詞に付された挿絵は、言うまでもなく、そうした贅沢への批判や戒めであろうか。あるいは、日々価値を減ずる紙幣を持っていることの危険性から、身を守るためには、ともかくも品物に換えておくことが賢明であった。そうした社会風潮を意識したものと解釈することもできる。紙幣であれコインであれ、急激なインフレーションに見舞われた時代、社会では品物への換金が日々の仕事ですらあった。どうせ価値を減ずる紙幣なら、日頃できなかった贅沢を、思う存分しておくのも、一つの生き方というものであろう。

図版㉓　Weimar 市の 75 プフェニヒ緊急紙幣

図版㉓　男も女も乾杯に次ぐ乾杯、盛大に飲み食いしている。ソーセージも鶏のもも肉も大皿一杯に盛り付けられ、食卓に運ばれるところである。

宮内卿「金を手にすると、肉屋・パン屋・居酒屋に走る。ごちそうのことしか考えない」

「地下の料理屋では皇帝万歳と気勢をあげております。皿ががちゃがちゃ鳴って、御馳走がさかんにつくられております」

思慮分別の無い飽食が嘲笑されているともとれるが、緊急紙幣発行者の思惑は、使えるうちに使っておかないと、翌日には二束三文の価値しかなくなってしまう、お金をどんどん使えば世の中景気が良くなるし、文字どおり、「皇帝万歳」なのである。緊急紙幣であれ通常の紙幣であれ、ともか

くも使ってしまうこと、宵越しの金を持たないことが肝要。究極の消費＝浪費の勧めである。

図版㉔　Hasloh 市の 25 プフェニヒ緊急紙幣

図版㉔　皇帝や居並ぶ宮廷官僚を前にして、またしてもメフィストの長広舌である。券面中央の彼が手にしている白いものは、どうみても只の紙切れ、パピアである[15]。

メフィスト「黄金や真珠の身代わりを勧める紙幣というものは、至極便利なものでございまして、計算も容易」

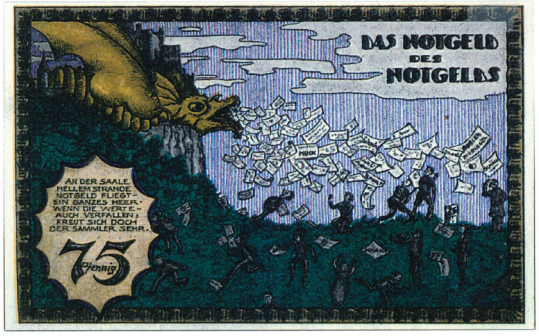
1-5　紙幣濫発のイメージ

ゲーテの『ファウスト』に直接の題材をとったものではないが、絵柄からしてファウストらしき人物が描かれている緊急紙幣を、最後に紹介しておきたい。

図版㉕　チューリンゲン州カーラ近郊ロイヒテンブルク発行のグートシャイン（緊急紙幣）には、中央に市当局の発行責任者と思しき人物が描かれ、「ドイツ、ノートゲルト発行」の文字を見上げている。その右手の背あきのドレスを身にまとった女性も同様のポーズである。右手隅の男性は当局側の人物。手前の山高帽にフロックコートの紳士は、何やらいわくありげな様子で立つ。この人物、ファウストを彷彿させると思うのは、筆者だけであろうか。

左の欄に「75 プフェニヒ　4 分の 3 マルク」右の欄に「75 プフェニヒ　カムラ都市交通局　署名

図版㉕　Leuchtenburg bei Kahla75 プフェニヒ緊急紙幣 表



図版㉖　Leuchtenburg bei Kahla75 プフェニヒ緊急紙幣 裏

A　B　通し番号 9482 」、下部に「1921 年 9 月 11 日まで都市交通局にて両替が有効」とある。

この緊急紙幣は、有効期限が一週間しかとられていないところから、好事家向けのもので、その発行枚数は 5 万枚を予定数としていた模様。

裏面㉖に描かれている絵では、ドラゴンが背を屈めてザール市民に向き合い、大量の緊急紙幣を吐き出している、人々は怖れ慄きつつも、紙幣を掻き集めてもいる。右上の雲のなかの文字は「ノートゲルトの〔なかに描かれた〕ノートゲルト」とある。左下の囲いの中には「ザール川の明るい岸辺に大量の緊急紙幣が飛び交う、有効期限がきれれば、むしろ収集家はますます喜ぶ」とある。飛び交う緊急紙幣のなかの文字は読み取り難く、肖像のような絵も判別が難しい。券面に数字らしきものは見当たらない[16]。

ゲーテの『ファウスト』に題材をとった絵画がノートゲルトに多用されたのは、もちろん時代状況と深い関連があったというべきである。『ファウスト』を愛読しゲーテを愛してやまないドイツ人にしてみれば、券面に描かれた絵画や引用された詩句、台詞は先刻承知、むしろそれを手掛かりとして、国家・社会への憤りを新たにし、あるいは時代風潮を嘆き悲しみ、どこにぶつけてよいのか分からぬ苛立ちを、ほんの一時、吹き飛ばしたのかもしれない。

次の章では、緊急紙幣の券面を飾った戯曲『ファウスト』の情景を、その前後も含めて改めて読み直して、より深い理解を得たい。また、ゲーテの金銭観についても若干触れてみたい。

2　ゲーテ『ファウスト』にみる錬金術としての紙幣発行

既に述べたように、ゲーテは、1775年以降、小領邦国家ヴァイマル公国の枢密顧問官であり、財務局長・国務大臣・宰相も務めた実務家であり、とりわけ経済政策とのかかわりが強く、財政破綻への対応に苦慮した経験も持っている。

おりしもイングランド銀行は、1797年に、首相ピットの命を受けて、発行証書＝紙幣と金との兌換を停止したうえで、小額の紙幣を大量に発行している[17]。ゲーテは『ファウスト』のなかで、紙幣が文字通り「魔術的存在」であり、経済が「錬金術的現象」であることを展開している。中世以来、錬金術師たちが追い求めた黄金の人工的合成は、ついぞ陽の目を見ることはなかったが、紙幣という人為的な貨幣が、いともたやすく錬金術にとって代わり、無尽蔵の富をもたらすことになる様を『ファウスト』は物語っている[18]。

2-1　第二部第一幕第一場「玉座の間」—地中埋蔵金への国王の権利—

「玉座の間」では皇帝と大臣たちが登場し、この皇帝を頂く帝国が、いま治安上、防衛上、国家財政上、更にまた内廷費においてさえ、まさに壊滅に瀕している危機的状態が、喜劇風に語られる。

先ず宰相が、国内の治安の乱れ、賄賂の横行による法秩序の崩れ、ありとあらゆる犯罪の横行について、また兵部卿は、国内の内乱状態や傭兵への給金不足を訴え、ついで大蔵卿が盟邦による助力も当てにはできず、失われた権利も多数に上ると述べ、続けて「金の流入口はふさがれてしまいましたので、‥（中略）‥国庫はいつも空なのだ」と上申している。

これに続けて宮内卿は

「節倹専一と心がけながら、諸掛かりは日毎にふえる‥（中略）‥歳入を担保に前借を致しますので、ユダヤ人は容赦なく、歳入を毎年前もってさらって行って」しまうと

嘆く。国家の危機に対処すべき大臣たちは、いたずらに右往左往するばかりである。

メフィストはこうした状況の宮廷に、道化としてまぎれこみ、窮状打開の相談を受ける。

メフィスト「この世の中に、不足のないところはございません。これがない、あれがない。ところで陛下はお手許不如意でいらっしゃる。お金 Geld と申すものは床にやたらと落ちていたりするものではございませんが、知恵才覚さえございますれば、ごく深いところから掘り出して参ることも出来ぬ相談ではございません。深山の鉱脈、壁の中、そんなところに金貨や棒金が見つけ出せるものでございます。」[19]

道化としての言いたい放題を利用して、メフィストは財政再建専門家としてのファウストを、売り込む。

皇　帝「進言、助言は聞き飽いた。金 Geld がないのだ。作れるものなら作ってみよ」

メフィスト「金は現にそこにあるのでございます。‥（中略）・‥そういう金銀はすべて地中にひっそりと埋もれております。ところで、土地はどなたのものでございますか。陛下のものではございませんか。さすれば地中の財宝は誰あろう陛下の有に帰すべきものでございます。」

大蔵卿「なるほど地下に眠っておるものは、古来陛下の御所有に係る」と述べて、メフィス

トの言に理解を示す[20]が、

宰　相「どうも神の思召しに叶ったことではない」と、こちらは些か批判的である。もっとも、

宮内卿「少々の不埒には目をつぶろう」

兵部卿「軍人は、金の出所は問わぬのだ」と述べる。

このやり取りを聞いていた皇帝は、苛立ちを隠そうともせず、財宝がどこにあるかを教えよと迫る。

メフィスト「到る所に主もなしに人待ち顔で埋まっている、宝の数々をいちいち申し上げられるものではございません」

皇　帝「金貨がいっぱい詰まっている voll von Goldgewicht 地中の壺を、掘り出して持ってくるがいい」

メフィスト「御自分で鋤や鍬をお手にお掘りなさいまし。百姓仕事は陛下の御威光を高めまする。されば黄金の仔牛がぞくぞくと地の底から躍り出て参ります。」

財政が逼迫した国家の宮廷を舞台に、メフィストの突拍子もない提案が、宰相を除く多くの閣僚によって、まじめな提案と受け止められ、皇帝も身を乗り出して目の前に黄金を持ってまいれと命ずる。この会話のやり取りは、喜劇として楽しむこともできるが、翻って、現実に財政難にあえぐ国家・社会に生きている人間にとって、むしろ皇帝と一緒になって事の成り行きを注視したくなる場面でもある。

2-2　第二部第一幕第三場「遊苑」
—埋蔵金を担保とした紙幣の発行—

場面は仮面舞踏会の開かれる大広間に移り、仮装し仮面を被った貴公子・貴婦人らの間でとりとめのない会話や出し物が延々と続き、焔のパフォーマンスなども催される。

メフィストは、「富貴」を象徴する神プルートゥスに扮したファウストとともに、様々な幻術で皇帝を愉しませる。どさくさに紛れて、国の窮状の打開策として、国土に埋蔵されているとされる、ありもしない無数の財貨を担保にした兌換紙幣の発行を提案し、皇帝の親署をまんまと勝ち取る。発行された紙幣は、瞬く間に内外に放出される。

その間の経緯を、戯曲は次のように展開していく。

宮内卿「支払いという支払いが悉く相済みまして、高利貸も爪を引っ込めてしまったのでございます。地獄の責め苦を脱することができました。天国といえどもかほどに愉快ではございますまい。」

兵部卿「前金払いで給料の片がつきまして、軍隊全体が新たに契約を結びました。兵卒どもはひどく御機嫌で、酒屋の主、飯盛り女なども景気は上々でございます。」

皇　帝「ほっと一息ついたという態だな。顔の皺も伸びたというところか。 大分慌てて参ったようだが。」

大蔵卿「こんどのことをやってのけましたこの二人に御下問下さいまし。」

ファウスト「宰相様が奏上なさればよろしゅうございましょう。

宰　相「永生きは致すものでございまするなあ。まずこの重大至極の文書の内容をお聴き取りの上、とくと御覧下さいまし。この文書がすべての禍を転じて福となしたのでございます。

（朗読）「知らんと欲する万人に布告す。
この紙片は千クローネン紙幣として通用すべきものなり。帝国領内の地中に埋められたる無数の金銀財宝 unzahl vergrabnen Gut をその担保となす als gewisses Pfand。
この無尽蔵の財宝 Schatz は直ちに発掘せられ、兌換の用に zum Ersatz 役立たしむ処置は講ぜられたり。」

皇　帝「そのような詐欺、瞞着の所行が許されようか。余の筆跡に似せて署名を致したのは誰か。かかる重大な犯罪が見過ごされておるのか。」

大蔵卿「お忘れでございますか。親署遊ばれたではございませんか。昨夜のことでございます。陛下はパンの神に仮装されまして宰相が私どもと一緒に御前に罷り出で、こう奏上仕ったではございませんか。

「この盛大なる御祝祭のお喜び、人民の幸福を、嘉せられて、一筆御願い申上げまする」

陛下は墨痕もあざやかにお認め遊ばし、その御親書を、昨夜のうちに奇術師をして何千枚にも致させました。御仁慈が遍く等しく及びまするようにと、あらゆる種類の紙幣に御親署を捺印し、十、三十、五十、百クローネンの紙幣が出来上がりましたのでございます。

民草のよろこびようは御高察の外でございます。街々を御覧下さいまし。これまでは黴が生えて死なんばかりでございましたが、それが只今では好景気で上を下への大騒ぎでございます。…（中略）…御親署ひとつで万人が幸福になるのでございます。」

皇　帝「ではこの紙切れが金貨 Gold として通用するのか。軍隊、帝室の費えがすべてこれで賄えるのか。奇怪至極のことと言わざるをえぬが、よしとせずばなるまいなあ。」

大蔵卿「飛び散ったものを回収出来ませぬ。あっという間にちらばってしまったのでございます。両替屋の扉は一杯に開かれっぱなしでございますが、と申しますのも、むろん割引の上で、紙幣を金貨や銀貨に Gold und Silver 換えて、払い出しをしておるからでございます[21]。

金を手に致しますと、肉屋、パン屋、居酒屋へ足を向けます。おいしいものを食べようとする者、服を新調して鼻をぴくつかせようとする者、生地屋は生地を売り、仕立て屋が針を運ぶ。

地下の料理屋では「皇帝万歳」と気勢を揚げております。皿ががちゃがちゃ鳴って御馳走がさかんに作られております。

皇帝の親署は直ちに版下に模刻されて、紙幣は大増刷される。券面には、この皇帝の署名のほかに、国土内の無尽蔵の金銀財宝が担保であり、いつでも紙幣を金銀に兌換できるとある。当初は宮廷出入りの商人、兵士、宮廷に働く者たちなどに支払われた紙幣ではあったが、瞬く間に王国中に流通する。こうして両替商はもとより、肉屋、パン屋、居酒屋、呉服屋も料理屋も押し寄せる客でごった返している。一挙に好景気が訪れたという次第。劇はついで、紙幣がどれほど便利なものかを話題にする。

2-3　第三場「遊苑」続き―紙幣の効用

メフィスト「公園のなかをひとりで散歩していると、‥（中略）‥大層な美人がお札に秋波を送るのでございます。忝い色恋の有難味を知るのに、愛想や口説に俟つ必要はないのでございます。‥(中略)‥お札一枚なら、ein Blättchen ちょいとポケットに挟んでおかれます。恋文と仲よく一つの封筒にいれることもできるのでございます。

ファウスト「無尽の宝が御領地の地中深く、利用もされず、人待ち顔に、じっと動かずに横たわっております。

どれほど雄大な構想といえども、このような富を取捌くことは到底出来ぬのでございます。‥(中略)‥しかし高邁な見識を持った人間なら、無際限のものに対して、無際限な信を置くことが出来るのでございます。

メフィスト「黄金や真珠の身代わりを勤める紙幣 Papier と申すものは、至極便利なものでございまして、計算も容易でございます。値踏みをさせるの、両替をするのという手間も要りません。これさえ持っておりますれば、色恋のこと、酒をたしなむこと、万事が手軽に運びます。硬貨 Metall が欲しい時には、両替屋へ行けばよろしゅうございます。両替屋が硬貨を切らしておりまする節は、一寸地面を掘りさえすればよろしいのでございます。掘り出された黄金の杯や鎖を売りに出しますれば、紙幣の価格だけのものは忽ち償却せられるという寸法でございます。そして最初私どもを信用せず不届きにもあざけった奴は大恥を掻くというわけでございますな。

慣れてしまえば、欠かすことは出来なくなります。という次第で、御領内至るところで、宝石 Kleinod、黄金 Gold、紙幣 Papier に事を欠くというようなことはないのでございます。

メフィストの弁舌は、理路整然としていて説得力もある。

・黄金や真珠の身代わりを勤める紙幣は、至極便利なもので、計算も容易である。
・値踏みをさせるの、両替をするのという手間も要らない。つまり、流通しているコインであれば、金の純度や含有量などを秤量しなければならないが、その手間も省けるうえ、各国・各地で鋳造・鍛造されたコイン間の交換＝両替比率などの煩瑣な手間も要らないということである。
・札さえ持っていれば、色恋のこと、酒をたしなむこと、万事が手軽に運ぶ。
・どんなに立派におめかしをしている婦人でも、札に横目を使う。婦人にお世辞を言ったり口説き文句を並べたてたりしなくとも、簡単に好い目が見られる。
・硬貨で財布や蝦蟇口を膨らませておく必要もないし、重たい金貨などでは封書の中にこっそりしのばせるわけにもいかない。札一枚なら楽にポケットに入れられる。まことに便利である。
・硬貨が欲しい時には、両替屋へ行けばよい。金への両替＝兌換を望む者が多く出て、両替屋に金の在庫がなくなった場合、掘り出された黄金や杯を競売にかけて値をつけたうえで、その値段で紙幣と交換する、紙幣を償却できる。
・最初、紙幣というものを信用せず、不届きにもあざけった奴は大恥を掻くという寸法である。紙幣は慣れてしまえば、欠かすことが出来なくなる。という次第で、領内至るところで、宝石、黄金、紙幣に事を欠くというようなことはない。

皇　帝「我が帝国はその方たちのおかげで大層な福を得た。直ちに論功行賞を執り行いたく思う。帝国領内の地底はそちたちに宰領させよう。その方らこそ地下の財宝の又となき管理者だ。その方どもは地下に安らかに眠っておる財宝のありかを心得ておろうから、発掘に当たっては、その方どもの指図に従おう。我らが財宝の奉行たるそちたちは心を合せ、そちたちの尊い役目をたのしく果たして、地上と地下とを結んで、めでたく一つにすべく、勤しみ励んでもらいたい。」

大蔵卿「私どももこれら両人といささかも相争うようなことは仕りますまい。魔法遣いの同僚、また結構なことでございます。」
（ファウストと共に退場。）

2-4　第三場「遊苑」続き—紙幣の使い道

皇　帝「では宮廷に出仕しておる者、一人ひとりに札を遣わそうか。その代り、その札をいかように使うかを余に言わねばならぬぞ。」

小　姓（札を受けつつ）「私は愉快に、朗らかに、上機嫌に暮らすつもりでございます。」

他の小姓（同上）「私はすぐにも恋人に金の鎖と指環、腕輪を調えてやろうかと存じます。」

侍　従（札を受けて）「私はこれまでのより倍も上等の葡萄酒を嗜むことに致しましょう。」

他の侍従（同上）「隠しの中で骰子がむずむずしておりまする。」

侍大将（沈重に）「拙者めが城と田畑を担保に借用仕った金を返すつもりでございます。」

他の侍大将（同上）「蓄えの中に繰り入れまする。」

皇　帝「余は新しい事業を始める意欲と勇気を期待しておったのだが、お前達のこと故、大方そんなことであろうと思った。成程なあ、どんなに宝の花が咲こうとも、お前たちだけのことでしかない。」

道　化（進み出て）「陛下、何卒やつがれにもお施し下さりませ。」

皇　帝「生き返ったか。しかし、札を遣わしても、忽ち酒に換えるのであろうな。」

道　化「魔法の紙幣 Zauberblätter、これは一体どういうものなのでございましょうな。」

皇　帝「そうでもあろう、ろくな使い方はせぬであろうからな。」

阿　房「あ、そこへお札が落ちました。それはど

う致しましたらよろしゅうございましょうか」

皇　帝「いいから取っておけ。お前の方に向って落ちたのだ。」（退場。）

道　化「五千クローネンが手に入ったとは。」

メフィスト「おい、二本足の酒袋、生き返ったか。」…・（中略）…・

道　化「これがほんとうにお金 Geld として通用するのかね。」

メフィスト「それでいくらでも飲み食いできるのさ。」

道　化「それから、田地や家屋敷、家畜なんかも買えるんですかね。」

メフィスト「知れた事だ。買うつもりがあれば買えないものはない。」

道　化「それから、森や狩り場や養魚池のついた城なんかも買えるのかね。」

メフィスト「くどい男だな。お前の殿様姿が拝見したいよ。」

道　化「では今夜は大地主になった夢でも見るとしようか。」（退場。）

メフィスト（ひとりになって）「阿呆にも知恵才覚はあるものだて。」

皇帝は宮廷に出仕している者、一人ひとりに札を与え、その代り、その札をいかように使うかを言わせた。小姓は愉快に、朗かに、上機嫌に暮すつもり、と述べ、他の小姓はすぐにも恋人に金の鎖と指輪、腕輪を調えてやる、侍従はこれまでのより倍も上等の葡萄酒を嗜むことにする、と言う。他の侍従は隠しの中で骰子がむずむずしている、博奕をやりに行くという始末。侍大将は城と田畑を担保にして借用した金を返すつもり、他の侍大将は蓄えに繰入れると申し述べる。

金を得てまずしたいことは、安穏な生活、酒、女、博奕、借金の返済に貯蓄。こんなところであろうが、廷臣らの返答をうけて、皇帝は、新しい事業を始める意欲と勇気を期待しておったのだが、お前たちのこと故、大方そんなことであろうと落胆して見せる。

蓄えというのは、今なら差し詰めタンス預金ということであろうから、廷臣たちのお金の使いようでは、お金は増えない、増殖しない以上、それぞれの手許はいずれまた、不如意となるはずである。そんな中で道化は、戯言のように、「魔法の紙幣」で田地に家屋敷、家畜、森や狩猟場・養魚池の付いた城あるいは大規模な土地を買いたいと述べている。異彩を放っている[22] この部分は、ファウストが拝領した領地の経営に打ち込む、後段の展開への伏線ともなっている。

2-5　第二部第四幕「高山」―紙幣濫発の結果

舞台は一転、紙幣濫発後の皇帝や帝国のあり様がファウストとメフィストとの間で語られ、王国中に謀反の動きが顕在化し、戦乱に至る経緯が繰りひろげられる。

メフィスト「例の、人のいい皇帝は大分御難儀の様子です。あなたもご存知の、あの皇帝ですよ。私たちがお相手を仕って、贋の富 falscher Reichtum をうまうまと握らせたあの時などときたら、全世界を買い占めかねないあり様でしたっけね。」

「だって、若くして皇帝の位に登ったものだから、国の統治と享楽生活とは、結構両立するものだし、またそれが理想だなどという誤った考えにふらふらと傾いてしまったのです。」

ファウスト「大変な間違いだ。人に命令せねばならぬ人間は、命令するというそのことに幸福を感じなければならない。‥（中略）‥享楽は人を卑俗にする。」

メフィスト「それだったのですよ。あの皇帝は、その遊びっぷりといったらなかった。

その間に国内は無政府状態に陥って、上下大小が争い合い、兄弟で互いに追っ払い合いをする、殺し合う、城と城、都市と都市が相争う、職人組合が貴族と渡り合う、僧正が僧会や信徒と喧嘩をする、人を見たら敵だと思え、で、教会の中で人殺しがある、商人や旅人は、危なくて市門の外に出られない。そこで皆が相当大胆にやるようになってきた。何しろ生きて行くには自衛し

なければならなかったのですからね——やれば、それでもやれたのですね。」

ファウスト「それでもやれた、足をひきずって、倒れた、起き上がった、それから転がって、ぶざまに折れ重なって往生した。」

メフィスト「そして、誰もこの状態に不服を唱えられなかったのです。極くごく小さい人物が大人物で通ったのです。だが遂に至極の好人物までもがどうにもひどいと思い始め、実力のある者は力で起ち上がり、世間を鎮めてくれる者をわれらの王とすると言い出したのです。」

「皇帝には世の中を鎮める力も意志もない——われわれの新帝を選び出そうではないか、そして国に新たな魂を吹き込んでもらおう、市民生活の安全を保証してもらって、生まれ変わった新世界で、平和と正義とを一つにしてもらおう、と言い出したのです」

メフィストに言わせれば「贋の富」と称された紙幣ではあるが、その大増発によって皇帝個人あるいは宮廷内の奢侈は節度を越え、享楽生活と国の統治が両立できなくなって、歯車が狂いだした。「享楽は人を卑俗にする」という台詞の通り、国内には不満が鬱積し、謀反の動きも顕在化してくる。この動きを陰に陽に扇動し支援したのは、メフィストに言わせれば、教会の僧侶たちであり、それは膨大、莫大な教会の所領・財物、税収を護らんがためのものであった。

皇帝軍と叛乱軍の戦闘の場面が展開されてゆく。メフィストとファウストとは、皇帝軍の陣中にあって、助言、進言を繰り返す。皇帝軍は戦に勝利し、論功行賞が行われ、新たに式部卿・侍従長・大膳職・酌人頭・大僧正が任命され、大僧正は宰相も兼務する。

皇　帝「帝国全体の政治のことは、その方ども五人の諸侯の重い任務としよう。

そちら五侯の采邑は、他の臣下のものより立派にしたい。そこで今ただちに、われらに叛いた者共の領地を併せて、その方どもの領地を広めて遣わす。忠良なるその方どものこと故、見事な土地を十分に授け与えるが、それと同時に、遺産相続、土地売買、交換等の機会ある毎に、それぞれに領地をさらに広げて行く大きな権限をも認めて遣わす。また法に則った領主の権限を自由に行使することも、この際しかと認めておこう。

法廷の最終判決も、その方ども領主の権限に属する。その方どもの最終判決に異議を申立てる上告は禁ずる。

さて又、租税、用益料、物納、通行税、関税、鉱山経営、製塩、貨幣鋳造もすべて允許する。」

所領の授与とこれに属する各種の権限が惜し気もなく与えられる。わけても所領内に通用する貨幣の鋳造権が允許されていることは、注目に値する。

五侯のうち、世俗の四侯が退場した後に、大僧正＝宰相が居残り、陣屋の跡地の、山林・牧野・河川・湖水・装置・畑地・低地など一帯を寄進せよと迫る。そこに教会を建設することの許可を願い出、さらに十分の一税・賃貸料・献納金など、一切の税の徴収を永遠に免除するように請願して、認められる。

これで済まないのが教会の凄まじいところであり、メフィストとファウストが軍功の見返りに皇帝から拝領した海岸の土地、「まだ海の中に拡がっているだけ」の土地—将来干拓すれば居住や耕作が可能となるであろう土地についても、大僧正は「あの土地の十分の一税・賃貸料・献納金、土地収益」を寄進するよう迫る。

皇　帝「あの分では、当座の引き出物に国全体を譲ってやっても満足すまい」

と慨嘆して幕となる。

ともあれ「贋の富」＝紙幣濫発に端を発した内乱・内戦状態は、軍事力によっていったんは終息した。論功行賞として、高位高官への任命をはじめとして、封建時代さながらの所領授与がなされている。五侯に期待されているのは、封建領主と

して、裁判権をはじめとする権限の十全なる行使であった。領主として領民を掌握し、税の徴収、鉱工業の振興、地域通貨の管理など、いわゆる所領の経営こそが肝要、とされている。

3　錬金術から兌換紙幣へ

西洋における錬金術の歴史[23]は長いが、勿論、誰一人として黄金を人工的に作り出すことに成功した者はいない。宮廷に雇われていた錬金術師たちは、失敗を繰り返しては追い払われ、王侯貴族たちの儚い夢も破れ続けた。金塊が絶対的に不足していた状況下でも、金を作り出す方法は、ついに見つからなかった。

やがて、大航海時代が切り開いた「新世界」の探査の結果、実物の金塊が西欧世界に続々ともたらされるようになる。この時代には、ヨーロッパと新大陸との間の交易が活発に行われ、増大する経済規模にみあった金の供給がなされたとしてよい。特に19世紀には、中央アメリカ・南アメリカについで、ロシア、カリフォルニア州のゴールドラッシュ、オーストラリア、南アフリカ、アラスカでも金鉱山の開発が続いた。しかし、実体経済の規模が金塊の絶対量をはるかに凌いでいくにしたがって、西欧各国では再び金欠病が蔓延する。かくして土地や教会財産、金などを担保とした紙幣や証券が、続々と発行されるようになる。

その一例が、18世紀フランスで既にみられた。ゲーテの案出したメフィストとファウストによる献策には、見本というか手本があったとされる。

森鴎外は『ファウスト考』のなかで、「未発掘の地下の宝」を「紙幣の基本金」とする妖怪メフィストの提案には、歴史的類例があると指摘している。それは、1720年にフランスが発行した「ミシシッピイの土地を基本にして出したロオの紙幣」および革命政府が没収した「寺院財産を基本にして出したアシニア紙幣」（1789年）であり、「いずれも国家の破産を誘致している」との指摘と注釈が添えられている[24]。

また、『ファウスト』を経済学の観点から詳細に分析したH.Chr.ビンズヴァンガーによれば、19世紀初頭に大きな財政危機に見舞われたオーストリア政府は、紙幣を発行する以外に方法がないほど追い詰められていたという。当然のことながら、この新紙幣は、既存の流通硬貨に比べれば「相場」が悪かったから、「割引率」も高かったに相違ないが、それでも、紙幣として流通していれば、経済は動いたというのである[25]。

さらにゲーテにとって『ファウスト』著述上で最も参考になったと推測される歴史的事例は、これまたビンスヴァンガーによれば、イングランド銀行が銀行券を発行し続けたことであったという。とくに、1816年になるとイギリスは金本位制を採用し、金への交換を保証することによって、紙幣への信用を醸し出していた[26]。こうした事例が『ファウスト』の叙述の下敷きになったであろうとの指摘である。

3-1　兌換を保証する紙幣の発行

紙幣の発行が、王室＝国家財政にとっても経済活動にとっても有益でありえたことは、歴史が証明している。鋳造・鍛造貨幣の時代には、金属貨幣の流動性ほどにしか物品は動かなかった。鋳造貨幣から紙幣への移行は、経済に劇的なダイナミズムを与えた。しかし、紙切れになってしまう恐れのある紙幣には、常に何らかの担保が必要であった。それは強大な皇帝＝国王権力による保証、金に交換できるという保証、あるいは有力な銀行による裏書であり、かつそれらが、紙幣を受け取る側に常に信認、信用されている必要があった。

妖怪メフィストとファウストが、金欠病の皇帝を救い出そうとして提案したのは、金鉱脈と地中に埋蔵されている金銀・財宝を「担保」とし、券面に皇帝の署名を付した紙幣の発行という計画であった。これによって皇帝は借財から解放される。

メフィストによれば、金鉱脈や埋蔵金に対する、国王の上級所有権が保証の根拠となる、という。大蔵卿もそれが古来、皇帝の権利であることを証言する。しかも布告には、それが無尽蔵だとさえ述べられている。

さて、この新発の紙幣を最初に手にしたのは、宮廷に詰めていた大蔵卿であり、宰相、兵部卿、

宮内卿らであったろう。彼らは、日々の支払いにも汲々としていたから、ここぞとばかりに出入りの業者や兵卒らに、新紙幣を気前よくばら撒いたのであろう。また、皇帝が舎人、侍従、侍大将、道化らに与えた紙幣も、大半は瞬く間に使われたに相違ない。その結果として、新紙幣は一挙に市中はおろか国中に拡散していったのである。

ちなみに、紙幣の額面は戯曲中の台詞による限りで言えば、5,000、1,000、100、50、30、10クローネンであった。とりわけ高額の紙幣を手にした民衆は、両替商のもとに殺到し、少々高めの割引料＝手数料を支払って、流通に使用されている額面の小さい既存のコインを手に入れて、商店などに急いでいる。

「両替屋が硬貨を切らしておりまする節は、一寸地面を掘りさえすればよろしいのでございます。掘り出された黄金の杯や鎖を売りに出しますれば、紙幣の価格だけのものは忽ち償却せられるという寸法でございます。」

この場面では、両替商が硬貨を切らした場合のことが語られている。ここで取り沙汰されているのは、金への兌換を望む者があり、両替商が当座の準備金がなく、その要求に応じられない場合のことである。そんな時は地面を掘れば良いと言っているが、乱暴極まりない議論である。掘り出してきた黄金を競売にかけて、然るべき値が付けられたところで、紙幣と交換してあげれば宜しいと読める[27]。

そもそも皇帝陛下の親署によって兌換は保証されており、金との交換はいつでも可能である。しかも金は無尽蔵である。このことを信用していれば、紙幣を安心して保持し、時に応じて支払いに用いることができる。民衆はもうそれだけで十分なのであり、交換、兌換を望む者など出て来ることはあるまい、心配は無用である。メフィストは高を括っている[28]。

3-2 兌換紙幣から不換紙幣へ

もちろん、埋蔵量は無尽蔵ではありえず、しかも掘削できないものが多くあれば、紙幣の発行にはおのずと制限が加えられる道理である。有限なものを紙幣の保証＝担保[29]にする以上、発行量もまた有限たらざるをえないからである。

劇中で皇帝は、地中に埋蔵されている金銀財宝を掘り出して、目の前に持ってくるように再三促している。しかし、メフィストは「陛下、ご自分でお掘りなさい」と言い、宮廷官僚たちも地中の金塊を掘り出したりしない。したがってだれも、それらを実際に見た者はいない。その量を推し量ることさえ誰もしなかったはずである[30]。

地下資源は、掘り起こされることも、掘り尽されることもなく、したがって兌換の根拠となっていた金鉱脈も埋蔵金も決して枯渇しない。このシステムは瓦解するはずのないものである。

つまるところ、この紙幣発行には実際上の制約はなかった。メフィストが入れ知恵した皇帝は、当初は「全世界を買い占めしかねない有様」で紙幣の大増発を行い、また「快楽の受用と国家の政治」とが両立しないことを忘れて、宮廷費を膨張させたとあった。

新紙幣の増発を切っ掛けとして、国内景気は大いに活況を呈してゆくのであったが、やがて帝権への信頼が失われ、国家は崩壊の危機を迎えることとなった[31]。

ゲーテは、この場面で、メフィストやファウストに、紙幣への信認がうすれたとか、紙幣の増発がインフレーションをもたらしたとかは、一切語らせていない。ビンズヴァンガーによれば、ゲーテは、当時のイギリスやオーストリアの経済政策、これに関連する経済学者の研究論文にも精通していたという。彼は、紙幣を適度に発行することは経済にとって絶対に利点があること、仮に貨幣数量の増大があっても、それが直ちに物価騰貴につながるとは限らないこと、物価の騰貴と並行して商品量の増大がもたらされること、而して流通を促す紙幣は商業に活力を与えることを、理解していたに違いないと明言している[32]。

ところが、である。メフィストとファウストの献策に乗って皇帝が発行した紙幣は、ある者たちによって受け取りを拒否され、信用されていな

かったふしがある。

メフィスト「そして最初私どもを信用せず不届きにもあざけった奴は大恥を掻くというわけでございますな。」

金銭は信用・信認によって成り立っている。受け取る側も支払う側も、それが有価物であり続けることを、信じて疑わない。そこに権力によって付与される保証〔という仮構〕がある場合、それを国民が信用するか否かが問題であって、信が失われれば一挙に仮構は崩れ去る。つまり紙幣という紙片「さつ」が「かね」として通用し流通するのは、人々がそれを「かね」と見做しているからであり、それを「かね」と認めなくなった途端に、「さつ」はたんなる紙屑となる。

皇帝によって発行された新紙幣をあざけって信認しなかった者たちは、メフィストによれば「大恥をかく」羽目になるとされたが、後になって、紙幣に親署していた皇帝への信頼が失せた時点で、彼らは皇帝に反旗を翻し、新たな権力の樹立を模索したと推測することもできる。

近・現代の自由主義経済の国家においては、やがて実体経済の規模が、各国中央銀行なり政府が保有する金の価値を凌駕してくるようになり、兌換保証は仮構とならざるを得なくなる。紙幣の発行高に歯止めをかける仕組みとしての、金本位制や金兌換制度は、機能しなくなる。場合によっては取り付け騒ぎが起こっても不思議ではない。それは、歴史上何度も繰り返されてきた。近・現代の金融・幣制の歴史は、それを未然に防ぐ手立てを模索する過程であったとしてよい。かくして金兌換紙幣・金本位制の停止ないし廃止が宣言され、現行の管理通貨体制へと移行する[33]。

不換紙幣になれば兌換の制約からは解放され、必要に応じて、それこそ無尽蔵に紙幣が印刷＝発行されるようになるはずのものである[34]。

3-3　紙屑となった紙幣とノートゲルト

第一次世界大戦後の困難な経済事情のもとで、急激なインフレーションが進行し、ドイツの民衆は物価騰貴に悩まされた。国家とかライヒスバンクへの信認は失われつつあった。銀行にいくら預金していようが、箪笥にいくら退蔵していようが、それらは日々価値を減じていく。続々と発行される高額面のライヒスバンクノートは、時々刻々無価値同然となってゆく。

現金を持っている者は、出来るだけ速やかに蓄財を減らすことに奔走する。消費経済は猛烈なスピードで展開し、いやが上にも活性化されていく。紙幣を物に換え、その物を闇市に運び込み高値で売却、手にした紙幣で次に買える物を入手し、また闇市で売却する。一般の庶民は、物価高騰とのいたちごっこを繰り返し、無我夢中でこの難局を乗り切ろうと必死であった。

高額面のライヒスバンクノートや釣銭用の小額紙幣の供給がひっ迫するようになると、人々は己の住む地域社会に、代替物を求める。手持ちのライヒスバンクノートで一杯になった籠を持ち込んで、地方自治体や地方銀行が発行する地域通貨＝ノートゲルトを購入するようになる[35]。

両者の違いは、以下の二点である。ハイパーインフレーション期に発行された、ライヒスバンクノートは粗末な紙質のモノクロ印刷が多く、価値を失ったとたん、焚付けや紙屑にしかならない。路上に落ちていても乞食ですら拾わなくなる。緊急紙幣は上等の紙質で、しかもそこに芸術的に価値の高い絵や図柄が、多色刷りで精巧に印刷されている。紙屑にしかならない紙幣を、地域限定の美しい緊急紙幣に換えておこうという心情は、理解できる。しかもそれは、値上がりするかもしれないという淡い期待に支えられた、庶民の細やかな投機の対象ともなった[36]。

いま一つの重要な違いは、緊急紙幣が有効期限を定めているのに対して、ライヒスバンクノートには有効期限という概念がないという点である。時々刻々無価値同然となってゆくライヒスバンクノートに対して、緊急紙幣の有効期限は概して短い。手にした者は出来るだけ早く、地域内で使い切ってしまわなければならない。そうすることで地域経済は確実に活性化する。もちろん、緊急紙幣に換えたからといって、進行するハイパーインフレーションに対応できるものではなかった。し

かし、そうでもしていなければ、座して死を待つだけであったのであろう。

まことに紙幣というものは、仮構の上に成り立っているものであり、人々の心に宿っている「信用＝信認」の情に翳りが見えたり、疑心暗鬼の気持ちが肥大化したりすると、一挙に崩れ去るものであることを肝に銘じておく必要がある[37]。

終わりに―ファウストによる土地経営

ファウストの仕上げの仕事は、皇帝から封土として拝領した浅瀬の土地に、排水用の溝を掘り、客土をして干拓する。波を堰き止め、堅固な堤防を築いて新開地とし、ここに幾萬もの民を招き入れ、自由な生活を送れる楽土を作りだすことであった。領主となったファウストは、元の海岸に住み着いていた老夫婦を追立て、結果的には焼き殺すことになるなど、専制的ですらある[38]。メフィストに命じて、集められるだけの人夫を集め、馳走と叱責で励まし、労賃をはずみ、うまく口説いて無理にでも働かせろ、と督励もする。ファウストの理想は、「自由な土地の上に、自由な民と共に生きる」ことであり、その瞬間が訪れれば、時に向って「止まれ、お前はいかにも美しい」と呼びかけ、「時間よ止まれ」と叫びたいという。

ファウスト「己の地上の生活の痕跡は、幾世を経ても滅びることがないだろう――そういう無上の幸福を想像して、今、己はこの最高の刹那を味わうのだ」

（ファウスト、うしろざまに倒れる。死霊立ち、彼を抱きとめ、その身体を地面に横たえる）

ファウストは、皇帝から拝領した領国において、封建領主として、裁判権をはじめとする権限を掌握し、領民の支配、税の徴収、鉱工業の振興、通貨の発行と管理など、小なりといえども国家経営の全権をゆだねられた。皇帝の紙幣発行の根拠ともなった土地そのものの経営こそ、ファウストが最後に追い求めた事業であった。それを果たさないままファウストは息を引き取り、壮大なドラマがここに終わる[39]。

参考文献リスト

・赤川元章（2012）「第三章　ドイツ」、國際銀行史研究会編『金融の世界史―貨幣・信用・証券の系譜―』悠書房所収
・大畑末吉（1972）『ファウスト論集』早稲田大学出版部
・小塩節（2010）『私のゲーテ』青娥書房
・カストロノヴァ, E.（2014）（伊能早苗・山本章子訳）『仮想通貨の衝撃』角川 EPUB 選書、第 2 章「貨幣のさまざまな形」p.70-119
・河野眞（2016）『ファウストとシンデレラ　民俗学からドイツ文学の再考に向けて』創土社
・キング，M.（遠藤真美訳）（2017）『錬金術の終わり　貨幣、銀行、世界経済の未来』日本経済新聞出版社
・グノー『ファウスト パリオペラ座公演』（1975）Gounod, Charles: FAUST Orchestra and Chorus Theatre National L'Opera de PARIS Conductor: Charles Mackerras, Producer : Jorge Lavell.
・ゲーテ（高橋義孝訳）（1968）『ファウスト（一）（二）』新潮社文庫
・ゲーテ（小西悟訳）（1998）『ファウスト』大月書店
・ゲーテ（相良守峯訳）（1999,2001）『ファウスト（一）（二）』岩波文庫
・ゲーテ（高橋義孝訳）（1978）『ファウスト グラフィック版』『世界の文学 9』世界文化社
・ゲーテ（J.M.Anster-1793~1867- の英訳を荒俣宏が日本語訳）（2011）『ファウスト　ハリー・クラーク挿画』新書館
・ゲーテ（森鴎外訳）（1972）『ファウスト』『鴎外全集 12 巻』岩波書店
・ゲーテ（森鴎外訳）『ファウスト』アマゾンキンドル無料アプリ
・クレイグ , ゴードン・A・（眞鍋俊二訳）（1993）『ドイツ人』みすず書房
・小西悟（1996）『現代に生きるファウスト』ＮＨＫ出版
・コガン , フィリップ（松本剛史訳）（2012）『紙の約束―マネー、債務、新世界秩序―』日本経済新聞出版社
・作者不詳（松浦純訳）（1988）『ドイツ民衆本　ファウスト博士』国書刊行会ドイツ民衆本の世界Ⅲ

・柴田翔（1985）『ゲーテ「ファウスト」を読む』岩波セミナーブック
・高橋義孝著（1979）『ファウスト集注』郁文堂
・田中 岩男（2009）「道化の知恵 –『ファウスト第 2 部』第一幕 ,「宮廷」の場をめぐって」『東北ドイツ文学研究』52 p.19 ～ 45
・塚本哲也（2009）『メッテルニヒ』文藝春秋
・鶴岡真弓（2007）『黄金と生命―時間と錬金の人類史―』講談社
・手塚治虫（1992）『ネオファウスト』朝日新聞社
・長谷川つとむ（1983）『魔術師ファウストの転生』東京書籍
・ビンスヴァンガー , ハンス・クリストフ（清水健次訳）（1992）『金と魔術』法政大学出版局
・前田靖一（2012）『財政破綻　ドイツマルク一兆分の一のデノミ』ミヤオビパブリッシング
・マウス , ハンスヨルク（金森誠也訳）（1987）『悪魔の友ファウスト博士の真実』中央公論社
・マーティン F.（遠藤真美訳）（2015）『21 世紀の貨幣論』東洋経済新報社
・マーロー , クリストファー（小田島雄志訳）（1995）『マルタ島のユダヤ人フォースタス博士』白水社
・溝井裕一（2009）『ファウスト伝説　悪魔と魔法と西洋文化史』文理閣
・森鴎外（1972）『ファウスト考』『鴎外全集 13 巻』岩波書店
・森義信（2004）「ドイツ中世の法諺」『藝林』53-2.
・森義信（2011, 2012）「ノートゲルト学事始め」「ハイパーインフレーションとノートゲルト」『大妻女子大学・社会情報学研究』20，21 号
・吉沢英成（1981）『貨幣と象徴　経済社会の原型を求めて』日本経済新聞社
・ルカーチ（菊盛英夫訳）（1969）『ゲーテとその時代』『ルカーチ全集 4』白水社
・https://www.notgeldmarket.com/collections/all/

・Bubeck,Ingrid(2007)Geldnot und Notgeld in Thüringen.,Sutton Verlag
・Coffing,Courtney L.A.(1983) Guide and Checklist World Notgeld 1914-1947, 2nd Edition
・Geiger, A.(2003)Deutsches Notgeld.Bd.3: Das deutsche Grossnotgeld 1918-1921,Gietl Verlag
・Goethe,J.W.v., Faust Eine Tragödie(1808)Tübingen; Der Tragödie zweiter Teil. Urheberrechtsfreie Ausgabe. アマゾンキンドル無料アプリ。
・Grabowski, H.-L., Mehl, M. (2009)Deutsches Notgeld.Bd.1-2,Deutsches.Serienscheine 3.Aufl.
・Grabowski, H.-L., Mehl, M., Deutsches Notgeld Bd.5-6(2004):Deutsches Kleingeldscheine:Amtliche Verkehrsausgaben,1916-1921.Gietl Verlag
・Keller,Arnold (2004) Deutsches Notgeld. Bd.7-8, Das Notgeld der Inflation 1923
・Schittny,H.Richard (2005),Sagen ,Märchen und Historisches im Spiegel des Kriegs-Notgeldes 1917 bis 1923 .Books on Demand GmbH, Norderstedt.
・Lund, Karl(1971) Das Papiernotgeld von Schleswig-Holstein und Hamburg1914-1923, Erich Proeh Verlag,
・Meyer. Hans, Das Papiernotgcld von Baden 19I4-1924 (1973)
Das Papiernotgcld von Bayern 1914-1924 (1974)
Das Papiernotgcld von Rheinprovinz 1914-1924 (1975)
Das Papiernotgcld von Schlesien 1914-1924(1975)
Deutsches Papiernotgeld von Südwestdeutschland, (1972)
Das Papiernotgcld des nachmaligen Landes Thüringen 1914-1923(1976)
・Müller, M.(2010), Deutsches Notgeld Bd.4 Die Notgeldscheine der deutschen Inflation von 1922 bis 1923, Gietl Verlag

注

1　クレイグ『ドイツ人』p.193. これらの施策により流通する貨幣の量は 5 倍にもなり、1918 年までにライヒスマルクは戦前の金平価の 2 分の 1 にまで下落した。

2　クレイグ p.167. またキングは 1923 年のドイツのハイパーインフレーションについて「悪魔との契約にこれほど苦しめられた国はそうない」と述べている。p.111.

3　ゲーテの『ファウスト』は若い頃から晩年に至るまで書き継がれたもので、第一部が 1806 年完成、1808 年刊行、第二部の公表は 1832 年、死後のことである。ゲーテは財務長官時代の 1782 年当時、軍隊の縮小など歳出を削減するとともに、収入源の開発にも尽力している。

4　フォーヴィンケル市はドイツ産業革命の中心地域に位置し、1929 年には周辺の都市が合併してヴッパータルとなって現在に至る、ノルトライ

ン＝ヴェストファーレン州デュッセルドルフ行政官区に属する。1923年になってから、当市でも緊急紙幣の発行が行われるようになった。

5　小西悟『現代に生きるファウスト』は、『ファウスト』が戯曲として、それも風刺や諧謔、笑いや批判をふんだんに含んだ楽しいお芝居であることを見出し、それに相応しい翻訳を試みている。

6　1923年11月ヒトラーがビヤホール一揆に失敗した三日後に、シュトレーゼマン内閣のルーター蔵相はダルムシュタット銀行頭取ヒャルマー・シャハトに通貨改革を依頼した。シャハトは金と土地を担保にしてレンテン・マルクを発行し、インフレーション―1ドルが4兆2千億マルクに下落していた―を終息させ、1ドル＝4.2マルクで安定させることに成功した。12個のゼロを消去し、1兆マルクを1新マルクと交換したのである。

7　1923年7月中旬以降、販売業者は、全国各地で、ライヒスマルクの受理を拒んだ。小売商人は1日の特定時間、1週中の特定日、に商売を停止しはじめた。かくして通貨の破局は更に進展し、食料および他の物品の供給が滞った。商店の前の長蛇の列、略奪、暴動が各地で頻発した。シャハト『戦時経済とインフレーション』P.70. フォーヴィンケル市では、1923年の8月10日付けで、10万マルク紙幣（市庁舎の描画）、50万マルク紙幣二種（白地とピンク地）、100万マルク紙幣、500万マルク紙幣二種（当市自慢の吊モノレール画二様）、1,000万マルク紙幣二種が発行されている。次いで9月20日になると、5,000万マルク紙幣と1億マルク紙幣が発行され，10月に入り、5億マルク紙幣―死の舞踏を戯画化した描画付き、絵の枠に沿って10月15日の物価が記載されている―の発行が見られ、同じ図柄で100億マルク紙幣が出されている。この二種は、金額欄が初めから空白となっていて、状況に応じて金額を印字できるようにされていた模様である。参照したネット上のサイトは、www.wuppertal-vohwinkel.net

11月22日には1兆マルク紙幣、さらに、11月30日にはアメリカ合衆国の地図と主要都市の名が記載された5兆マルク紙幣も出され、絵の枠の外周には1914年7月の物価と1923年11月30日の物価が並記されている。このように、額面は膨大に膨れ上がり、そこに記されていた当市における諸物価は、下表のごとく暴騰している。参考資料としてここに掲載しておく。

付表　フォーヴィンケルにおける1923年の物価変動

	1914/07	1923/10/15	1923/10/30	1923/11/15	1923/11/23	1923/11/30
水	2/100pf	9萬8千	2,200萬	4,000萬	2.5億	2.5億
塩	10pf	4,200萬	8億	200億	1,500億	1,000億
卵	8pf	7,500萬	20億	1,400億		7000億
牛乳	20pf	1.52億	40億	960億	3,800億	5,600億
薯	3pf	4,000萬	8.5億	100億	500億	850億
鰊	10pf	5,000萬	9億	150億	900億	1,300億
パン	15pf	2.1億	40億	350億	2,500億	4,000億
豚脂	60pf	12.5億	150億	3,200億	1.5兆	2.6兆
靴底	3Mark50pf	60億	350億	1.2兆	8兆	10兆
書	死亡診断	6億				
棺	80Mark	450億	4500億	8兆	90兆	90兆
砂糖	22pf				5500億	6500億
服	75Mark					200兆

＊水、牛乳は1ℓ、塩、薯（馬鈴薯）、パン、豚脂、砂糖は1㌔、卵、鰊、靴底、書（死亡診断書）、棺、服（紳士服）はそれぞれ1単位。pfはプフェニヒ、貨幣単位明記のないものはマルク。一か月半の間に見られた食料品の値上がりの大まかな数値を示しておくと、パン・豚脂・ジャガイモが2,000倍前後、塩・水・鰊が2,500倍前後、牛乳が3,700倍、鶏卵が9,000倍強である。

8　緊急紙幣コレクションの検索地名としては、Brocken ⇒ Schierke im Harz である。

9　Schittny,H.R. p.115. これらは所謂「シリーズシャイン」である。

10　かかる地方の公共企業やコミュニティによるノートゲルトの発行によって、地域への愛着、地域住民の誇り、地方のアイデンティティが生まれた。キング、p.238-239.

11　ファウストは、グレートヘンとの情交を果たすために母親に飲ませる睡眠薬をグレートヘンに渡す。量を誤って母親は帰らぬ人となる。また、グレートヘンとファウストとの恋愛を彼女の兄に反対され、ファウストは争った挙句彼を殺害してしまう。ファウストが逃亡した後、妊娠が判明したグレートヘンは、生まれてきた嬰児を溺殺して、逮捕・投獄され処刑を待つ身となる。『ファウスト第一部』は、メフィストフェレスによって仕組まれ、ファウストによって実行された悪魔の所業と、その犠牲となったグレートヘン一家の悲劇である。もとはと言えば、グレートヘンが装身具の入ったプレゼントの小箱に目が眩みファウストを受け入れたことに、悲劇の元凶がある。なお、パリオペラ座シリーズ『歌

劇ファウスト全5幕』は見応えのある作品である。また、手塚治虫の漫画『ネオファウスト』は、ゲーテ『ファウスト』第一部を現代の日本に場を移しつつ、見事なまでに視覚化している。手塚は第二部の冒頭を描き始めたところで帰らぬ人となってしまった。なお、第一部の文学論的考察については、ルカーチ『ゲーテとその時代』に詳しい。ルカーチによれば、「悪魔の本性は露骨な金銭欲と性欲」「ゲーテが描いた悪魔の知恵は金銭と性欲の二つに帰結する」p.203,210. とある。

12　このセットも「シリーズシャイン」である。拙稿「ハイパーインフレーションとノートゲルト」81ページなど参照。

13　以上の図版の出典は Bubeck, Ingrid, Geldnot und Notgeld in Thüringen. p.77.

14　さらに推測でものを言わせてもらえば、劇中の人物たちは紙幣よりは金銀硬貨に価値があることを、承知していたのかもしれない。

15　高橋訳『ファウスト』のなかで「紙幣」と訳されている箇所のドイツ語は das Papier で、第二部全体で4か所（内一か所は証文）、また Blatt, Blätter も「お札・紙幣」と訳され、8か所ある。「お金」は das Geld あるいは das Gold で、前者は3か所、後者は44か所あるが、所によって後者は「黄金」「金きん」と訳されている。また「硬貨」「コイン」は das Metall で6か所。

16　Bubeck,I., p.2, 4.

17　イングランド銀行は、17世紀の末葉から、金貨の預かり証を発行していた。証書の持ち主はいつでも金貨に換えることができたので、彼らは、これを小切手や紙幣のごときものとして、第三者に手渡すことも、使用することもあった。18世紀末葉、革命後のフランスとの戦闘が始まると、イングランド銀行発行の証書を金貨に換える動きが活発化した。しかし、国策上、戦争資金としての金貨・金塊の保持が、戦争遂行の上で急務であったことから、兌換の停止となった次第である。本文中の「1797年の停止」は、こうした事情からである。こうしておいてから、不換紙幣を大量に発行したので、インフレーションが進行したという次第。キング、p.99-100.

18　ビンスヴァンガー P.9；鶴岡真弓『黄金と生命―時間と錬金の人類史―』p.367以下。

19　“Gold ist gemünzt und ungemünzt zu finden”. がこの部分の原文。金は鋳貨やインゴットの形で見付かるということ。そもそも地中に眠る金銀財宝を探し出そうとする企ては、いつの時代にも見られた。ゲーテの『ファウスト』に先立つ『ファウストス博士』伝説第58話のなかに、ファウスト博士がメフィストの助けを借りて財宝を探すくだりがある。メフィストはヴィッテンベルク近郊の古い礼拝堂の地下室に財宝が眠っていることを教える。ファウストがそこに行ってみると、財宝が灯火のように輝いているのがみえたが、そこには巨大な龍が横たわっていた。ファウストが呪文を唱えると龍は穴の中に消えて居なくなった。宝を掘り出してみると、それはただの石炭であったが、家に持ち帰るとたちまち金や銀になったという話である。ゲーテはこの伝説を、もちろん承知していたであろうが、石炭が黄金に変わるくだりを、地中に眠る金銀財宝を担保とした紙幣の発行に変換させている。17，18世紀のヨーロッパでは宝さがしが流行したそうで、それはうち続く戦乱の世に、教会や修道院はもとより、金持ちの俗人や市民・農民に至るまで、略奪から財貨を守るために、これを地中に埋めた。多くの場合、埋められた財貨は地中に取り残されたままとなり、噂や言い伝えに基づく宝さがしが流行ったという次第である。溝井裕一 p.143-154。なおファウスト博士実在説については、マウスの著作を参照。実在した人物ファウストが命を懸けて研究したのは錬金術であり、1539年、シュタウフェン男爵の依頼で、銅や鉛などの金属から黄金を人工的に作り出す実験のさなかに起こった大爆発によって絶命したという。

20　鉱脈などの地下資源に対する権利は、現代の日本では地権者に属するが、土地に対する私有権が確立していない時代には、国王特権に属していた。中世以来の法諺では、「鋤、馬鍬、大鎌が行くところで、黄金を探してはならない」とある。しかし、『ザクセンシュピーゲル・ラント法』1-35-1では、「鋤が達するよりも深く地下に埋没している貴金属は、すべて国王の権力に属する」とあり、とりわけ金については土地所有者の権限外、国王バンのもとにおかれている。ただし銀については、同法典の1-35-2に「いかなる人も他人の土地の上で、その場所を所有するものの同意なしには、銀を採掘することは出来ない」

とあり、農民の同意があれば採掘ができたようである。森義信「ドイツ中世の法諺」p.58-59.

21 この部分の原文は、”Man honoriert daselbst ein jedes Blatt durch Gold und Silber, freilich mit Rabatt”「紙片」を「割引手数料を払って」と明記してある。

22 柴田翔 p.237, p.240 は、「ファウストは地下に埋まっているはずの財宝という、きわめていかがわしいものを担保に兌換紙幣—その実、不換紙幣—を濫発して、国家と宮廷の財政難をたちどころに救って見せます。人の好い皇帝、つまり善良だが支配者に必要な意志力を持たぬ皇帝は苦境を救われて狂喜し、周囲の人々に紙幣を際限なく分け与える。が、それを受け取った人々もすぐに無駄に使い果たし、賢明な投資をするのはただ宮廷道化（メフィストではなく本当の道化）ひとりであったというのがその結末で、国家と宮廷のますますの混乱を暗示して、第一幕の前半は終わります。」

23 鶴岡真弓は、『ファウスト』を「錬金術のドラマ」とみる見解をとり、象徴文学として理解すべしとしている。

24 森鴎外『ファウスト考』p.187.「ロオの紙幣」とは、フランス財務長官ジョン・ローが、フランス領ルイジアナの開発計画を喧伝し、これを担当するミシシッピ会社の株式と王室に対する債権との交換を進めたこと、この株式の株価が半年余りで 20 倍に暴騰する、かくして政府債務は政府株式に交換された次第。1717 ～ 1720 年にかけてのことである。マーティン, p.254-274. アシニア（アッシニア）紙幣は、フランス革命期に没収された聖職者の財産を担保として 1789 年から 1796 年まで発行された不換紙幣。当時大量に乱発されたため、インフレを巻き起こした。

25 ビンスヴァンガー、p.183. オーストリアは対ナポレオン戦争で、1808 年にシェーンブルン講和会議をもち、ザルツブルク・ガリツィア・チロルなどの領土を放棄し、8,500 万グルデンの賠償金を課された。1815 年のウィーン会議から 1848 年ウィーン三月革命まで、国家債務にかかる利子は毎年、国庫歳入の 30％にのぼった。1816 年には、初の通貨発行銀行として、オーストリア国立特別銀行が設立されている。19 世紀初頭、国際的な危機と干渉の時代に、国家の財政破綻とは裏腹に、オーストリアの軍事費は飛躍的に増大し、宮廷の皇族たちは相変わらず派手であり続けた。塚本哲也、p.308-

26 イギリス政府は、貨幣法によって、直径 22mm、重量 7.98805g、金純度 91.67％の金貨を本位金貨と定めた。これはソブリン金貨と呼ばれ 1817 年から鋳造された。紙幣との兌換が開始されたのは 1822 年からであった。注の 17 でも触れたように、フランス革命からナポレオン戦争の間、停止されていた金への兌換が、再開されたのである。

27 たとえば、500 クローネンの紙幣を持ちこんだ場合、どれほどの重量の金に交換してもらえるのか、イギリスの事例ではそれが明白であり、だからこそ金本位制と言えるのだが、ゲーテは劇中、紙幣が持ち込まれたら金塊を掘り出してきて競売にかけ、値がついたところで、紙幣と交換すればよいとしている。この限りで言えば、金の価格づけをその時々の市場に委ねているということで、金と紙幣の交換比率を固定しない、変動制の金兌換紙幣とも呼びうるシステムである。

28 ビンスヴァンガー、p.28,48：国家によって兌換が保証されているということを、国民が信じていれば十分で、誰一人として兌換を希望する者などは出てこない。埋蔵されている財宝を紙幣に換えることが可能だという空想、埋蔵金が紙幣の担保になるという想像を国民が共有することが前提である。

29 ハイパーインフレーションの時代、緊急紙幣の発行に追われたドイツの諸邦、市町村や企業は、限定された地域に流通する緊急紙幣に、小麦や穀類、ジャガイモ、石炭などとの兌換を保証する手立てを講じていた。例えば Traunstein では額面 5，10，50 プフェニヒの馬鈴薯ノートゲルトが、ポンメルンラントの Greifenhagen 市ではライ麦シャインが、発行されている。拙稿「ハイパーインフレーションとノートゲルト」p.83etc において適宜紹介してきたので、そちらを参照されたい。

30 金本位制下の近・現代になってからも、国民は中央銀行の金庫にどれだけの金塊が保管されているかを実際に確認することはなく、共同幻想に支えられて紙幣を受け入れてきた。

31 理屈だけからいえば、紙幣の造幣は、経済をより早く大規模に活性化できるのであり、皇帝に

よる紙幣増発が帝国の内紛の唯一の原因だというわけではない。

32　ビンスヴァンガー、p.182-183

33　コガン p.106 によれば、ピーター・ベルンホルツは「歴史上のハイパーインフレーションは、・・・中略・・・すべて 1914 年以降の裁量的な紙幣本位制のもとで起こっている」と述べているという。現在よく使われている「管理通貨制度」というよりも、「裁量的な紙幣本位制」という表現に、筆者は着目したい。

34　アメリカ合衆国も EU も日本も一様に、金融緩和政策による景気の浮揚、適度なインフレーションの誘発を策しているが、膨大な数量の紙幣が市中に出回っても、一向に景気は浮揚しないしインフレも進行しない。他方で財政赤字が膨らみ、積み重なることで、金融不安は募るばかりである。紙幣の増発が帰結するところは、いずれにせよ、歴史が教えている。

35　ライヒスバンクノートの価値下落が続き、高額紙幣の発行が追い付かない状況下、庶民は籠に一杯、リヤカーに一杯の紙幣を詰め込んで、買い物に出かける羽目になる。しかも、それで買えるものはごく僅かであった。フォーヴィンケル市の緊急紙幣発行状況が物語っていることは、籠に一杯のライヒスバンクノートをまずは一枚の高額面の地域通貨に換え、市民らはそれを持って商店なり闇市に駆け込んだということであろう。

36　ノートゲルトのみならず、隣国の通貨、切手などの有価証券も庶民の投機対象となった。

37　ビットコインに代表されるデジタルマネーは、実物ではないので、紙幣や貨幣のような素材としての価値はゼロである。それのみならず、国家権力とか有力銀行の保証といった裏付けもなく、担保も信用も付与されていない。それにもかかわらず、中華人民共和国の多くの民衆は、人民元を仮想通貨に換えている。そこにあるのは、共産主義独裁政権への疑心暗鬼であり、通貨人民元への根深い不信であろう。中国政府はビットコインへの規制を強化し、2017 年 9 月には国内の取引所を閉鎖した。

38　ピレーモーンとバウキスと称するこの老夫婦は、自給自足の生活を送っており、ファウストの行う「公共工事」にとって障害物であるだけでなく、貨幣経済にとっても「敵」であり、その存在は否定されねばならなかった。鶴岡前掲書、p.424。

39　エンディングの場面で、ファウストはすでに視力を失っており、彼を埋葬する墓穴を掘っているシャベルの音を工事の音と捉えるなど、理想国家建設の進捗状況を確認できていない。ファウストの魂は、グレートヘンが聖母に祈りを捧げたおかげで、悪魔に引き渡されることなく、天上に召されたとされる。

The Scenes of Goethe's "Faust" seen in Paintings on the Emergency notes during the Weimar period —Issue of Paper-money as the Alchemy—

YOSHINOBU MORI
Professor Emeritus at Otsuma Women's University

Abstract

In the Part 1 of Goethe's "Faust", the tragic character Gretchen was attracted by jewelry that Faust presented. She received his present and had a sexual relationship with him. She went ahead through the way to ruin by this deed.

In the Part 2 of Goethe's "Faust", the Emperor who suffered from financial difficulty, accepted the advice of Mephistopheles and Faust. The Emperor issued paper-money as the security with gold veins and the buried treasure deep in the ground of the Empire. On these paper-money was signed by the Emperor himself and explicitly was written to be converted into gold. Thus the imperial economy prospered temporarily by issue of these notes, but the order within the Empire was disturbed, and then the civil war broke out.

The inflation that progressed in Germany during World War I., quickened the uptrend through the Weimar period. At this time, the prices rose sharply and the value of money declined every day. Therefore Reichsbank(National Bank) and the local government issued additional vast money and emergency notes of high denominations. Some Notgeld took up, as subjects of paintings, the plot scenes concerning the money in the drama "Faust", and painted them on the tickets.

In this paper, I presented and analyzed such quotations from "Faust" and paintings drawn on the ticket-side. On the other hand, I checked closely the text-parts of the "Faust" in question dealing with money. In summarizing these considerations, I wrote a short essay about the gold-convertible paper-money and unlimited issue of the inconvertible paper-money.

Key Words（キーワード）

Exchanger（両替商），Faust（ファウスト），"Faust"（『ファウスト』），Goethe（ゲーテ），Gold convertible note（金兌換券），Gold vein and Buried treasure（金鉱脈や地中埋蔵金），Gretchen（グレートヘン），Issue（紙幣発行），Kaiser= Emperor（皇帝），Mephistopheles（メフィストフェレス），Notgeld=Emergency money（緊急紙幣），Paper-money（紙幣），Vohwinkel（フォーヴィンケル），Weimar（ヴァイマル）